

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese di Kyoto

BEL CICLISMO!

* 素晴らしき自転車レース③ *

谷口 和久

●私の愛したイタリアン・バイクたち

「私の愛したイタリアン・バイク」とまずタイトルを書いてみて、ここでふと「正しくは『私が愛したイタリアン・バイク』ではなかろうか」などと、細かい言葉遣いがえらく気になるようになってしまったのは職業病の予兆かもしれない。あまりよろしくない傾向だ。

さて、これまで15年余りロードレーサーを乗り継いできて、「駆け抜ける喜び (©BMW)」を与えてくれたのは圧倒的にイタリアン・バイクの数々であった。

初めて手に入れたロードレーサーは、日本製の「三連勝」というマニアックなブランドのものであった。別に初めからマニアックな自転車乗りであった、もしくはマニアックな自転車乗りを目指していた、というわけではまったくなく、ただ単に近所の自転車屋にその三連勝がたくさん並べられていて、その中から一番安いものを選んで買っただけのことであった。これは後から知ったことだが、この三連勝は競輪のトッププロなども愛用しているブランドだそうで、実際、今から振り返っても乗り味など素晴らしいものだったが、当然ながら初心者段階ではその良し悪しは皆目わからず、「ロードレーサーって気分良いな～」という単純な感想しか持ちえなかった。

●自転車妄想曲

そのうち自転車雑誌なぞ読み漁るようになり、「新車インプレッション」といった類の新車情報の

記事をあれこれ読んでいるうちに「この自転車に乗ったら、もっと速く走れるに違いない！」という妄想がムラムラと膨らんでいき、三連勝を購入してからまだ2年経つか経たないかのうちに早くも次の自転車への買い替えを考えるようになってしまった。今ならはっきり言える。「速く走れるかどうかは、自転車ではなく、本人の能力・努力したい」と。しかし、駆け出しの当時はまだ「評価の高い自転車＝速く走れる良い自転車」という認識であった。その頃、最も気になっていた、すなわち最も妄想を掻き立ててくれた自転車は「モゼール“MOSER”」であった。これは、かつて世界チャンピオンにも輝いたことのあるイタリアの名選手、フランチェスコ・モゼール“Francesco Moser”の興したブランドである。



【世界チャンピオン フランチェスコ・モゼール】

話はまったくそれるが、近年の不景気は「健全な妄想」が欠如していることが原因の一端ではないだろうか。テレビや雑誌、それにインターネット上での妄想を刺激する情報の供給過剰による不感症化、あるいはこれまで「未来の夢」を示してくれた現代社会が、結果として品質問題や環境問題といった「未来の不安」をもたらしてきたこと。近頃、自転車が「環境にやさしい乗り物」として、この不景気の中でも脚光を浴びているのは、そんなことも背景にあるのかもしれない。閑話休題。

さてさて、そのモゼールを置いているという自転車店を雑誌で調べて、さっそく行ってみた。店に入ってみると、三連勝を購入した近所の店よりはるかに多くのインポート自転車が所狭しと並べられており、まさに「まばゆいばかり」であった。特に強烈な印象を与えてくれたのは「コルナゴ“COLNAGO”」という、これまたイタリア製の自転車であった。自転車、というよりむしろマイセンなどの磁器を思わせるような美しいペインティングと、メッキの妖しい輝きが私を魅了した。「これが欲しい・・・」という視線の先にぶらさがる「〇十万円（正確な額は失念）」の値札が、私のささやかな希望と財布を打ち砕いた。



【コルナゴ“COLNAGO”のフレーム】

さて、所望のモゼールはやはり雑誌で取り上げられていたせいか、すでに在庫がなく、やや失望気味の私に店員が勧めてくれたのは「ウィリエール“WILLIER”」という自転車であった。これはイタリア・ヴェネト州に本拠地を置く自転車メーカーで、私にとっては初耳のブランドであったが、なんでもマルコ・パンターニという、おそろしく登りの速いイタリア人レーサーが乗っている自転車だと言う。実際、手にしてみるとおそろしく軽い。なぜならそのウィリエールは、それまでの主流であった鉄製の自転車ではなく、アルミ製なのであった。自

転車雑誌の情報で頭デッカチになっていた私の脳みそには「これからの主流はアルミ！」とインプットされていたので、これはなんとも魅力的であった。カラーリングはかなりビビッドな黄色を主体としたもので、自分にはちょっと派手すぎるかな、という気がしないでもなかったが、アルミの軽さと、先ほどのコルナゴよりはかなり財布にやさしい価格設定に惹かれ、ウィリエールを購入することに決めたのであった。



【ウィリエール（筆者私物）】

さて、購入して乗ってみると、乗り心地も非常にスムーズで軽く、ピシッと圧雪されたゲレンデを、エッジを研ぎ澄ましたスキー板で滑っているかのような心地良さであった。登りでも軽く進み（これが必ずしも「速く」とイコールにはならないのである、残念ながら・・・）、その購入後の7月のツール・ド・フランスで、件のパンターニがウィリエールを駆って2つの区間で勝利するのをテレビで目の当たりにして、まるで「自分の中にパンターニが乗り移った」かのように、速く走っている心地（すなわち誤解）にさせてくれたのであった。



【ウィリエールを駆るパンターニ】

そんなふうに気分よく走れるウィリエールにも欠点がないわけではなかった。まずアルミというのは、重量は非常に軽いのだが、その特性上、振動吸収性が鉄などに比べるとかなり劣るので、長時間走ると体の芯になんとも言いがたいシブ～い疲れが蓄積されるのであった。また、振動吸収性が良くないということで、荒れた路面では、ことに下り坂などを結構なスピードで下っていると、まるで「地震が起こっているのか？」というほどの振動が体に伝わってきて、ヒヤッとさせられることがしばしばであった。

●「自転車熱中症」激化

それでも、このウィリエールに乗り始めてからレースにも出るようになり、自分の中の「自転車熱中症」を大いにヒートアップさせてくれたのであった。そんなこんなでますます自転車の世界にのめりこむようになり、自然と「行きつけの自転車屋」というのが出来た。ここの店主もかなりのイタリアン・バイク好きで、ことあるごとにあれやこれやと勧めてくれるのだが、ミレニアムの2000年、かつてコルナゴが私に与えてくれた、いやそれを上回るインパクトをもたらす自転車に出会った。それはイタリア北東部、ヴェネト州の美しい町トレヴィーゾにある「ピナレロ“PINARELLO”」というブランドの「オペラ“OPERA”」という名の自転車であった。細身のフレームに流麗なカラーリング。なによりその本体に、鉄に加えて新素材のカーボンが組み込まれていることに驚かされた。車体の前半分が鉄、後ろ半分がカーボンで、両者を組み合わせることで、振動吸収性や推進力を高めた設計となっているのである。

実際、乗ってみると、ゆるやかな上り坂など、まるで後ろから誰かに押してもらっているかのように「スーーーーッ」と進んでいくのであった。また、下り坂も、あたかも「空を滑空している」かのような感覚に襲われるほどであった(もちろん、筆者に「滑空」の経験はありませんが)。

このピナレロでは本当に多くの「駆け抜ける喜び」を体験することが出来た。ピナレロを購入して

からというもの、乗鞍や美ヶ原のヒルクライム(標高差1000メートルを超える坂道をひたすら登るレース)やツール・ド・沖縄(国内最長・最大のアマチュアレース)といった大会に参加したり、下関から京都まで日本海沿いの800キロをツーリングしたり、さらにはこの自転車を飛行機に積んでフランスに飛び、「エタップ・ド・ツール」というツール・ド・フランスのアマチュア版に参加、フレンチ・アルプスの峠4つを越える140キロのコースを走ったのも、ピナレロと共にある思い出だ。



【ピナレロ@渡月橋(筆者私物)】

その後、一時期フランス車に浮気した時期もあったが、最近ようやく「これぞ自分の分身」とも言うべきイタリアン・バイクに出会うことができたが、その話はまたあらためまして。

(当館スタッフ)

イタリア発月刊日本語新聞



イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy
Tel. & Fax : (06) 4743. 212
E-mail : comeva@nipponclub.it
URL : www.nipponclub.it

『カルヴィーノとアーティチョーク』

第4回

堤 康德

トリノ市内に、<神の摂理の小さな家>、あるいは、創立者の名前から単に<コットレンゴ>と呼ばれる施療院がある。1832年から42年にかけて、司祭のジュゼッペ・ベネデット・コットレンゴによって設立されて以来、とりわけ心身障害者の介護施設として今もその名が知られている。



【『投票立会人の一日』表紙】

共和制イタリアの2度目の総選挙が行われた1953年6月7日、カルヴィーノは、共産党の候補者として(名簿の頭数をそろえるための候補者にすぎなかったというが)、この施療内に設置された投票所を訪れている。この総選挙は、得票率50%以上を獲得した政党または政党連合が議席の

65%を獲得できるという新しい選挙法(野党からは「いかさま法」legge-truffa と揶揄された)のもとに実施された初の選挙だった。選挙の結果、第一党キリスト教民主党と、第二党の共産党の得票率はそれぞれ、40.10%と22.60%であり、キリスト教民主党を中心とする与党連合(キリスト教民主党、共和党、民主社会党、自由党)の得票率は、50%に届かなかった。

その10年後の1963年に出版されたカルヴィーノの中篇小説『投票立会人の一日』(*La giornata di uno scrutatore*)の構想は、このときのわずか10分程度の短い訪問によって芽生えたものである。しかし、作品として結実するには、1961年の地方選挙で、<コットレンゴ>の投票立会人となるという実体験が必要だった。

この作品の執筆にいたる経緯は、1963年3月10日付『エスプレッソ』誌に掲載された、ジャーナリストのアンドレア・バルバートとのインタビュー「<コットレンゴ>の6月7日」で詳しく語られている。

施設内における選挙の経過すべてに立ち会う投票立会人を本当に経験して初めて、私には物語がひとつ書けるのではないかと思いました。<コットレンゴ>で私が投票立会人に任命される機会は、1961年の地方選挙で巡ってきました。ほぼ2日間にわたり<コットレンゴ>で過ごし、私も大病室まで投票を集めに行く投票立会人のひとりとなりました。しかしこのあと、何ヶ月も書くことができなくなったのです。私の目に焼きついていたのは、理解することも話すこともできなければ、動くこともできない障害者の姿と、彼らの票が司祭や修道女に委託されるという喜劇であり、このイメージがあまりにも強烈だったがために、きわめて攻撃的なエッセイか、反キリスト教民主党のマニフェスト、あるいは、このようにして獲得された票(多いか少ないかはここでは問題ではない)のうえに権力を築く一政党に対する一連の呪詛しか、私には書けそうもなかったからです。要するに、最初はイメージが不足し、今度はイメージが強すぎたのでした。イメージが遠ざかり、記憶のなかで少しずつ色あせてゆくのを待ちました。私は思考を熟成させ、同心円状に広がる波のようにそれらのイメージから放射される意味について、さらに考えることを余儀なくされました」(*Note e notizie*

sui testi, in Italo Calvino, *Romanzi e racconti*, vol. II, a cura di Mario Berenghi e Bruno Falcetto, Milano, Mondadori, 2008, p. 1314)

『投票立会人の一日』に描かれているのは、1953年の総選挙で〈コットレンゴ〉の投票立会人を務める若い共産党員、アメリーゴ・オルメーアの一日である。

カルヴィーノはまず、〈コットレンゴ〉を、まるで迷路のような、「都市のなかの都市」として、次のように描き出す。

人口の密集する貧しい地域に広がり、一区画全体を占めるこの施設は、幼稚園、病院、養老院、学校、修道院が一体となったものであり、城壁に囲まれた、別の規則が支配する、都市のなかの都市である。新たな寄贈物、新しい建物や事業によって、徐々に膨張した身体のように、その輪郭は不規則的だった。

最終章で、〈コットレンゴ〉のなかで育ったという、生まれつき両手のない50歳の男が、施設内のすべての仕事をこなす自立したホマー・ファベル(工作者)として、投票立会人たちの前に現われ、「私たちに不足しているものは何もない」、「私たちはひとつの都市のようなものだ」と語るとき、〈コットレンゴ〉が、労働と生産の行われる自立した都市であることが明らかになる。

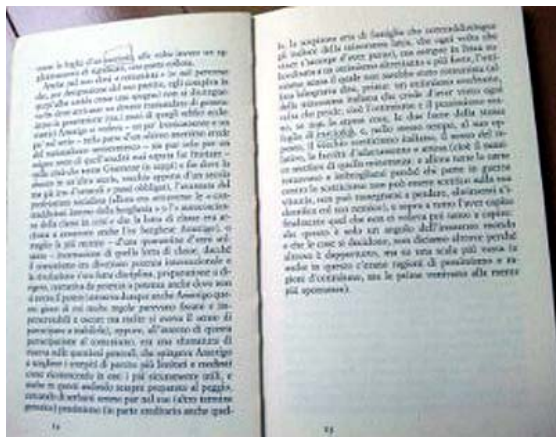
この小説を、順を追ってたどってみることにしよう。投票日は雨の日だった。アメリーゴは、何枚も重ねて壁に張られたピラがずぶぬれになり、それぞれのピラから、対立する政党のシンボルマークが透けて見えるのを目にして、次のような思いを抱く。アーティチョークという言葉は、ここで最初に現れる。

アメリーゴにとって状況の複雑さは、アーティチョークの葉のように、截然とは分けられない幾重もの層のように見えることもあれば、いくつもの意味の絡まりあい、練り粉状の糊のように見えることもあった。

このあとに続く、2頁にわたる1段落は、多くの括弧書きが挿入された、たったひとつのきわめて

長い文章によって成り立っている。ここに綴られているのは、ごく簡単に要約すれば、「18世紀の合理主義者の最後の無名の後継者」を自認する「元ブルジョアのアメリーゴ」が、共産主義が国際的な潜勢力となった時代においてなお共産党員であり続けることの、内省的な考察であろう。従来の明晰な文体とは大きくことなる、入れ子の箱のような文体を採用した理由について、カルヴィーノは、批評家のクラウディオ・ヴァレールゼ宛の手紙のなかで、「共産主義者とは何を意味するか説明するために、論理性と複雑性が並立するような構文において、すべての意味が分節化されるような、きわめて長い一文を必要とした」(Italo Calvino, *Lettere 1940-1985*, a cura di Luca Baranelli, Milano, Mondadori, 2000, p. 770)からだと説明している。

1956年、ポズナン事件とハンガリー動乱に対するイタリア共産党の「許しがたい現実の隠蔽」を批判して、翌年に共産党を離党したカルヴィーノにとって、『投票立会人の一日』の構想から出版までの10年は、共産主義者であることの意味を絶えず自らに問い返す年月でもあったことだろう。



【『投票立会人の一日』本文】

アーティチョークが、この長い一文のなかで、再度使われる。アメリーゴを共産主義者たらしめている「楽観主義と悲観主義は、同じものではないにせよ、アーティチョークの同じ葉の表と裏だった」というくだりにおいて。最初のアーティチョークが、重層的で複雑にからみあう状況の比喩であるなら、もう一方は、相反することがの同一性の比喩であろう。しかし、このふたつの比喩自体もまた、まさにアーティチョークの葉のように重なり、響き合っているように思われる。

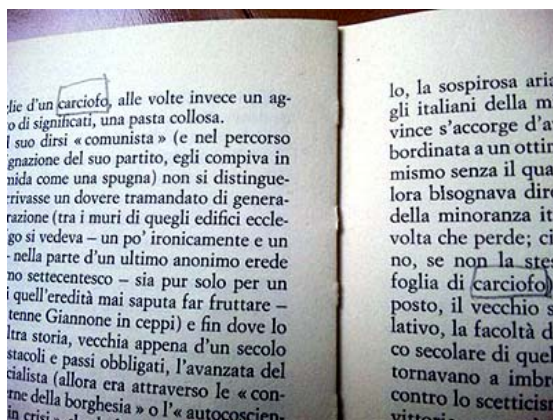
投票立会人の任務は、投票の不正を監視することにある。しかし<コットレンゴ>の投票所では、どの政党を代表しているかによって、立会人どうしで意見の衝突が起こる。盲目の患者につきそって投票ブースまで同行しようとする司祭にたいし、アメリーゴと、社会党の女性立会人は反対するが、キリスト教民主主義の立会人と投票所の所長はそれを許可するのである。

<コットレンゴ>からいったん帰宅したアメリーゴは、マルクスの本を開く。自然を「人間の非有機的体」と規定したマルクスの『経済学・哲学草稿』の一節を読みながら、彼は、<コットレンゴ>の障害者もまた、現存するすべての富を享受するのだと確信する。自然が人間の身体の延長であるならば、人間に障害があるかどうかは大きな問題とはならないはずだからである。さらに彼は、共産主義によって、「盲人は、目をもたないことを忘れるほどに、世界を知るための数多くのアンテナをもつのだろうか」と自問する。そこへ、恋人のリアからの電話が鳴る。ささいなことで口論になったあと、アメリーゴはリアから妊娠を告げられる。

意思、思考、判断だけでなく、感情すら欠いているような彼ら障害者たちの生にたいして、アメリーゴは、「人間はどこまでが人間的だと言えるのか」という悲痛な問いを発する。あたかも、アウシュヴィッツの捕虜についてプリーモ・レーヴィが投げかけた、「これが人間かどうか」という問いと呼応するかのよう。

アメリーゴはその問いにたいする答を、一組の父と子の姿に見出している。日曜日に<コットレンゴ>の息子を見舞った老父は、息子と同じベッドに腰かけ、ひたすらアーモンドの殻を割って息

子に食べさせているのだった。



【『投票立会人の一日』“carciofo”の記述】

そうだ、とアメリーゴは考えた。あのふたりは、あるがままに、お互いにお互いを必要としている。

そして考えた。そうだ、このような生のあり方こそ愛なのだ。

そしてさらに思った。愛が届くかぎり、人間なのだ。人間は、私たちが付与する境界を除けば、境界をもたないのだ。

連載の2回目で、私は、「カルヴィーノの自伝的小説では、父と子の関係が大きな重みをもっている」と書いた。『投票立会人の一日』においても、主人公とその恋人以上に、この父子のあいだに、深い絆が結ばれている点が注目される。

(翻訳家、慶應義塾大学講師)

… 会館 だ よ り …

イタリア語検定 直前講習会

10月3日(日)に行われる実用イタリア語検定の本番に向けて、よく出題される文法事項や日本人がひっかかりやすいポイントを懇切丁寧に指導します。

・日時:

内容・時間は京都・大阪いずれも同じ
大阪 9月12日(日)
京都 9月19日(日)

①5級向け: 10:30~12:00

②4級向け: 13:00~14:30

③3級向け: 15:00~16:30

④3級作文模試: 16:30~17:00

・費用: 2科目 一般・受講生 3,000円

維持会員 1,500円

1科目 一般・受講生 2,000円

維持会員 1,000円

※3級作文模試は別途1,000円で、

3級向け対策受講者のみオプションとして受講可

・会場: 日本イタリア京都会館 本校
同 大阪梅田校

編集・発行 / (財) 日本イタリア京都会館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4

TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357

E-mail: centro@italiakaikan.jp

URL: http://italiakaikan.jp/